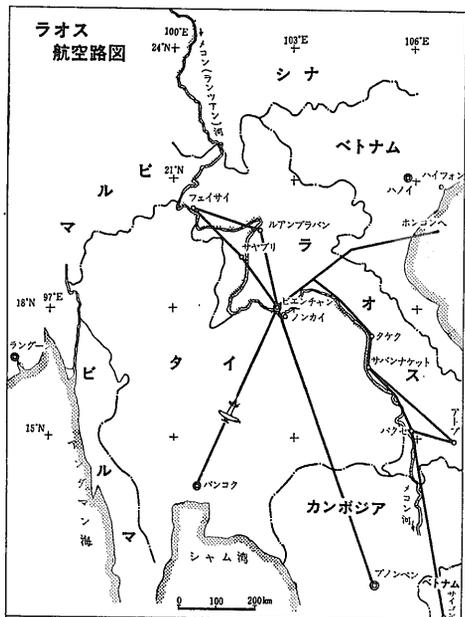


沢田秀穂

1968年6月末 急の話で目下 ラオスで作業中の国連鉱産調査団の事業主任に私のボスのL博士がなられ 私にその補佐役のお鉢がまわってきた。L博士も私も以前ラオスを訪れたことはあるが いずれもこの鉱産調査団の作業の始まる前のことで 一度現在実施中の調査や今後の計画について現地側と十分話しあい またラオス政府の調査機関の実情をみる必要があり かつは事業主任 同補佐としての新任の挨拶をかねる意味もあって さる1968年10月15日から18日までラオスのビエンチャンをL博士とともに訪れるの機をえた。

15日火曜日 16時15分バンコクのドンムアン空港を離れる。飛行機はラオス王国航空 Royal Air Lao のDC6 かつてジェット機が活躍するようになる前には日本航空その他で太平洋航路にも使っていた花形機である。四発の大きなプロペラ機で くさってもタイさすがに中はゆったりしているし なかなかの速力がある。

乗客は20人ほどで これでは相当の赤字だろうとまず余計なことが頭に浮かぶ。可憐なスチュワーデスが三人一人は白人との混血のようにみえる。銀色のベルトをしめ スカートのはしに金糸の模様のあるラオス婦人の風俗。まずオレンジジュースとセブンアップ(サイダーのごときもの)である。つづいてケーキ みかんが一つ ハムのサンドイッチ 香港製の角砂糖が二つ コーヒー。スプーンと小揚子がロー紙に包んである。おしぼり紙の入った包みの表に印刷してある図によるとこの航空会社の線は 香港 バンコク プノンペン サイゴンへ国際線 他にビエンチャンを中心としてラオス国内の王都ルアンプラバンなどの6つの町にとんでいる。ラングーン マニラ 大阪は予定線らしい。ビエンチャン空港には17時35分着。この間タイ国上空をとぶのがほとんど全部で ラオス国内はメコン河上空から空港までの500m あるかなしの距離にすぎない。このことなど今問題の東京—モスクワ間の日ソ共同運航についての交渉の際 何か日本側の参考になりはしないかなどと思う。ちょうど夕陽がメコン河の上におちる所で川の面が銀盤のように光る。



ビエンチャン空港は一面草原のようなすこぶる牧歌的なもので 建物はこじんまりとした二階建 作りはインドネシア ジャカルタの空港ににている。L博士は5年前に比べて大いに変わったという。DC3型機がうじゃうじゃいて かなりの数がまっ白なCIC(国際休戦監視委員会)の飛行機である。国連の駐在員事務所の人々に迎えられ 15分程で空港の手続きを終わりホテルへ。車はエアコンつきのべらぼうに大きな米車 最近米国から入れたものだという。こういうセンスとやり方がますます国連の評判をおとしていくのに多くの職業的国連事務局員は気がつかないらしい。こんなことには金をつかうくせに われわれの仕事に使う紙がひと月もふた月も一枚もなくて L博士自身航空会社のメモ用紙などを使っていることがあるといつても 大方の

日本人は信用して下さらない。今度でも私たちの旅費は一文もまだ出ておらず ラオス航空の切符を一冊ぼんとよこしただけである。L博士がポケットから財布をだしてバンコクでかえてきたというラオスの紙幣10,000キップをかして下さったのだが(もともとバンコクより現地の方が米ドルは割よくかわることが 後になってわかった)。車は右側通行 これはフランスの統治下にあったなごり バンコクは日本同様左側である。車の数はバンコクに比べるとずっと少ないが 前回1965年2月訪問 当時に比べればぐっと多くなっている。タイでサムローとよぶ人力の三輪車もかなり多い。ホテルは国営で この前はまだ完成しておらず朝食しかできなかったが 今度はパーまでできていてそのパーに入っで一休み。金の入った財布を裸のままボーイに渡してしまい 後でちょっと気になったが のちほどへやでみると無事であった。パーには白人が何人かたむろしていて 後日の経験からするとこの町としては高級な溜り場であるらしい。

ホテルのへやは道をへだててすぐメコン河にのぞむ。向こう岸はタイの村である。ガラスの錠戸がもうこわれかけている。浴室の大きな電気温水器には Paris の字が入っていて こんなものをわざわざフランスからここまで運んでくるというわれわれからみたらバカげたことが行なわれている。タイルの浴槽も洗面台も皆そうしたものであろう。ところがこの温水器 30分以前からスイッチを入れておかねばならず できたお湯は浴槽をみたくすにたりない。すべてこうした国のホテルは欧米人の客を基準にして作られ運営されているのだから 全く現地の一般状況からはかけ離れた世界であり しかも運営するのは大部分現地人だから設備にいかにか金をかけても いくらもたたぬ内にこわれたり全く使えなくなってしまう。プラスチックの造花はいかによくできていても所詮は生命のかよわぬ造花である。

19時30分から20時30分までホテルの食堂で夕食をとる。ピフテキ2人前 ブドウ酒小ビン1本それにパイパイ1皿で 10米ドルに近い。ずい分と高価である。食料からうっわもの 家具と食堂の中にあるものは人間を除いてほとんど全部輸入品だし ラオスは内陸国だから港へあげてから(大部分がバンコク経由)他国の中を運んでこなければならぬ。欧米人が彼らむきの生活をここでしようとしたら なかなか金のかかるものやむをえまい。食後L博士と街を散歩してみたが この時刻まで開いているのは皆シナ人の店で 香水 口紅などの化粧品 酒タバコの類をうる店の多いのがめにつく。フランスの他 中共やら台湾からのもの 中に日

本のサントリー 丹頂 パイロットなど。バンコクをたつ前 水泳の生徒の女性諸氏から化粧品を買ってくるようたのまれたが どうも他のものの値段からおすとバンコクよりも必ずしも安くはなさそうである。L博士はタバコと中共青島製^{チンタオ}のなつめの干したものを買う。ナイトクラブらしいものが2—3軒 SUKIYAKI という看板のあるシナ飯屋。22時10分ホテルへ帰る。

16日 水曜日

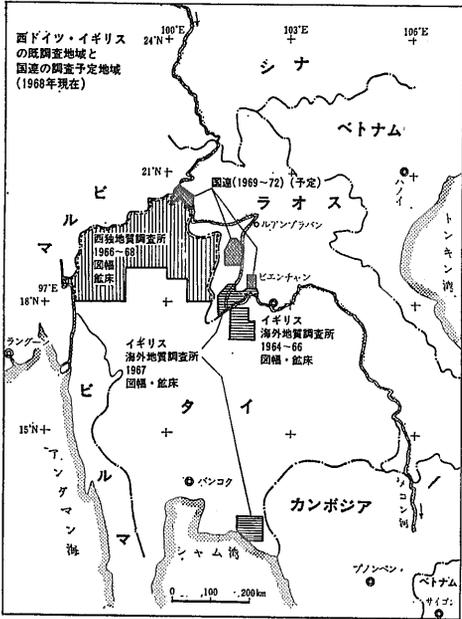
7時におき へやの前のバルコニーにでて前にひろがる並木とメコン河とをスケッチする。向こう岸のタイの村の木々が一本一本はつきりみえる。自転車に乗った人々 自転車の数はまだ少ない。

7時40分から8時30分ホテルの食堂で朝食。トースト パター パパイア 470キップにサービス料70キップ計540キップ。L博士はオレンジジュースをとったが これがなんと日本製のピクニックなどにもっていく小さな缶。街にはみかんがあふれているのに 海山こえてこんな水物を運んでくるとは。

8時30分陸路バンコクから鉄道できた Minerals Adviser のW博士夫妻がホテルに着く。同博士はイギリスの海外地質調査所から派遣されて北東タイと北西ラオスの地質調査に数年間従事 今度国連のメコン委員会に入った人である。まだ30代で新婚早々。9時国連の下うけでラオスの鉱産調査をやっているフランスのBRGM(地質鉱産調査局)班のX班長が打合わせにやってくる。同氏はフランス語をたくみに話すがオランダ人である。他の班員4名はすべてフランス人とのこと。

問題になったのはジェットボート 試錐用水の運搬および現地側の負担についてであった。ジェットボートはニュージーランド政府がメコン委員会に寄付したもので新しいものだけでも4隻あり 小艇であるが快速を有しラオスのように陸上交通の不便な所では非常に有効な運搬手段である。試錐用水については水源から試錐位置まで5~15kmもあり とてもポンプは使うことができないため 四輪駆動車または トヨタ2½トントラックで水を運ぶが すべてほとんど道のない所をゆくため わずか2調査シーズンで6車輻全部6,000米ドルもかけて大修理をしなくてはならぬほどにいたんでしまった。

1968年11月から1969年5月にわたるのが現在の国連のラオス鉱産調査計画最終野外調査期で 空中磁気探査でわかった6つの磁気異常地のうちから4ヵ所を調べる予定。この地域はメコン河が王都ルアンプラバンから南下してビエンチャンに向かい東に曲る屈曲部の内側にあたり 対岸には1963年~1966年アメリカ合衆国の地質調

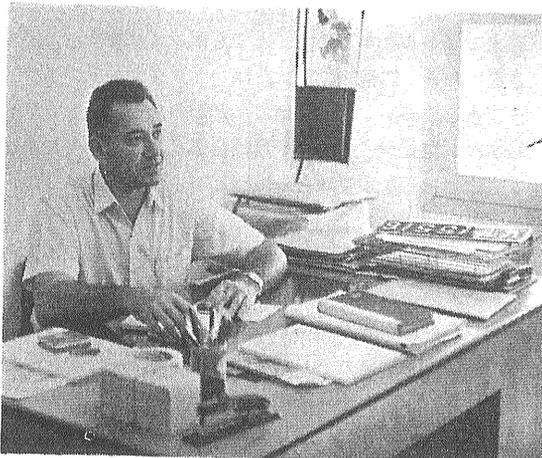


Dr. C. Y. Li
(ビエンチャン UNDP 事務所)

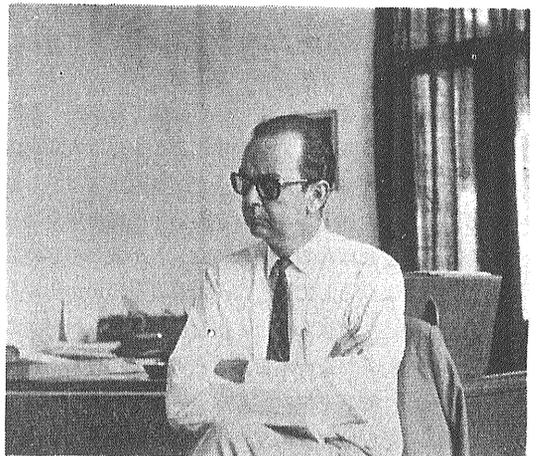
査所が国連の下うけで タイの鉱山局と ともに調べた Loei 鉱徴地帯があり 地質的にはその延長部に当る。 ついでながらこの Loei 地帯にはこの時の調査の結果 銅分約1パーセントの確定・推定鉱量1,600万トン 可能鉱量6,200万トンが報ぜられ 一時大分喧伝されたものである。

X班長の考では今度の最終野外調査期の最も重要な仕事は 現地技術員の訓練であって 鉱産資源の有望なもの発見そのものについてはあまり楽観的ではないようである。 同班長はセメント用石灰岩の試錐三坑延長計200m をラオス人技術員だけで今回やりとげたということを 非常に強調しており ラオス人がこの方面について才能があるという意見である。

11時からはビエンチャンにある国連駐在員事務所を訪れ 現在の調査計画についての打合わせと 将来の調査計画についての説明 検討。 この説明の中で強調された点は ラオスがメコン河下流々域内でもっとも鉱産資源については有望と思われる国であること 鉱業が発展するとこれにつれて各種の産業も発展してくること 鉱産物の輸出によって 外貨を得ることができること 将来の調査地域として提案されている地域の中の北西ラオスは 現在西ドイツ地質調査所が調査中の北タイ 先述の国連の金で アメリカ合衆国の地質調査所の調べた北東タイの Loei 地帯 イギリスの海外地質調査所が二国間援助で調べた北西ラオスなどと同一の鉱床区に属すること イギリスの海外地質調査所は この地域の航空写真による地質調査の室内作業をロンドンで 1969年1月1日から開始し 野外調査は同年10月に開始できる見込みのこと 地質調査や鉱産資源開発は長期にわたる事業であるから ラオスの地質調査機関を ラオス政府 友好諸国による二国間援助および国連の援助などによって 今すぐ強化し始めなければならないこと そしてそれがうまくいけば ラオスの地質調査機関はメコン河下流々



Van Daalhoff 班長 (ビエンチャン UN-BRGM 班事務所)



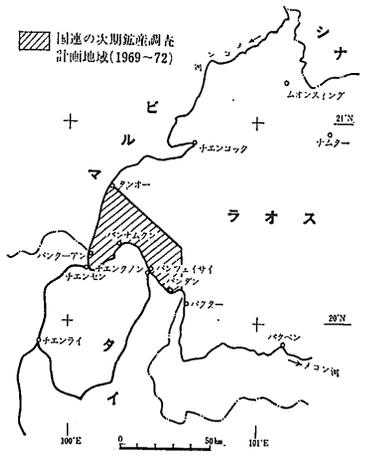
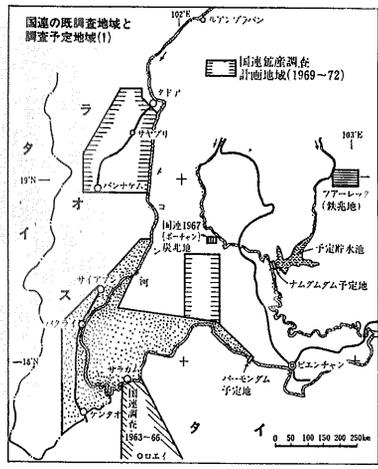
Schellenberg 副所長 (ビエンチャン UNDP 事務所)

域各国（カンボジア ラオス タイ 南ベトナム）中にあって一つのモデル機関になると思われること これまで訓練された現地技術員が今調査を中断してしまうと仕事もなくなりさらに訓練を受けることもできなくなってしまふこと その他であった。

駐在員事務所次長はスイス人で純然たる国連事務職員であるが 以上のような説明 討議の行なわれる際判断が正確 迅速でツボをよくおさえていくのには感心した。 なおラオスはフランスが統治していた関係上 現在もフランス語が最もよく用

いられる外国語で 英語は通用範囲がせまく 従ってこのスイス人のようにフランス語 英語ともよく使える人が活躍しやすい。 この点日本人で英・仏両語をたくみにあやつる人は少なく このようにフランス語の一般的に用いられる国で しかも英語を使うことも多い場合など 大きな障害のあることが一般である。

11時50分駐在員事務所を辞し ホテルに帰る。 パーでのみもの 食堂で昼食をとりながらL博士 W博士夫妻 X班長といろいろ話す。 W博士の「なぜタイでは研究的な仕事が行なわれないのだろう」という言葉に対し L博士は「沢田君の意見はタイのような湿潤熱帯では基礎的な研究に頭をつかうというようなことはできない というのだが これについては同意しがたい。 しかしいずれにせよ タイは世界的に著名な退任した地質家を招くべきである」として 同博士の若い頃シナに Grabau を招いた折 シナ人の学生や地質学者は給料は少なかったにもかかわらず この著名な学者とともに仕



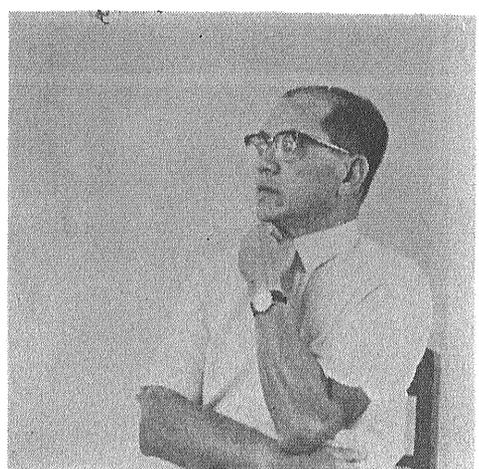
事をするということに喜びを感じてはげんでいた例をひいていた。 また同博士は前述の将来の計画の説明の折ラオスの役人たちは給料が安く その上この国での地質調査は容易なものではないのだから せめて野外調査からビエンチャンへ帰ってきた時 きれいで設備のいい気持ちのよい建物の中で 誇りをもって仕事のできるよう初めはそう大きなものでなくてよいから とのつた建物をたてるべきで 国連の金はこのような場合にはなかなか使えないから 何とか友好国の援助でこの目的を達したいものだとのべていた。

このホテルの名は Lane Xang Hotel であるが Lane Xang とは多象（の国）といういみで 従ってシナではラオスを萬象国とかくことがあり またシナの地図にはメコン河のことを瀾滄江と記したのがあるが これは Lane Xang の音にあてたものと思われる云々……。

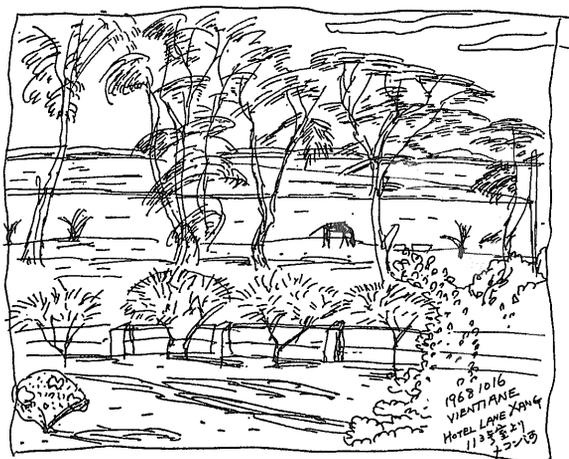
また BRGM の国連に対する請負の各項目は一般に比べてベラボーに高いという指摘に対し 事実そうであること さらに入札の折 その高額なためにおちた場



Dr. D. R. Workman(メコン委員会 Minerals Advisers)



オケオ委員長(ラオス メコン国内委員会)



ランザンホテルよりメコン河を望む (筆者のスケッチ)

台のある話などでもた。

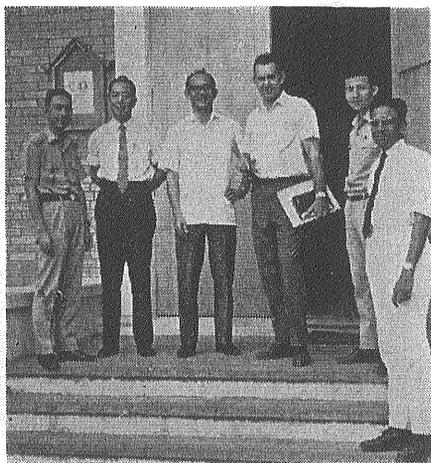
ラオスはラテン系の国々の一つフランスの統治下にあったせいだ 役所の勤務時間にはシエスタ(ひるね)の時間が入っているようで昼休みが長い。われわれが次にラオス鉱山局を訪れたのは15時。ここでも午前と同様の相談 説明 討議。最近同鉱山局は企画省から経済省に移され 局長はフランスで教育をうけた採鉱技師 国連の鉱産調査計画の担当官はこれもやはりフランスで学んだ地質技師 もう一人石油地質技師がいてこの人はルーマニアで7年間勉強している。この他現在外国留学中のラオス人の地質 採鉱技師はフランスに1人 ルーマニアに1人の他ソ連に何人かいる由である。ただしソ連などにいる留学生がこちら側にくるか パテトラオ側に行くかはわからないらしい。現在同局に勤務している外国人技師は3人 内1人はインドからコロンボプランで派遣された採鉱技師 以前はインドの石炭公社におり 金属鉱山の経験もあるとのことで ラオスの鉱



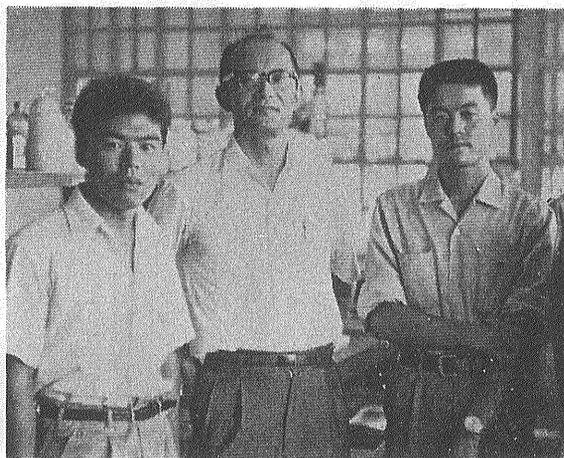
Viravong Souvannavong 局長(ラオス鉱山局会議室)

山法規を調査し 改訂する仕事に当たっている。あとの2人がかねてW博士からきいていた“幻の日本人”でバンコクでははっきりしたことがわからず ぜひあつて話をしたいと思っていた人々である。上にのべたラオス鉱山局側との話し合いのあと ちょっと時間をもらって別棟二階の化学分析室に働いている“日本人”を訪れる。アンモニアガスの鼻をつく あまり換気がよくない部屋で 現地人たちと共に働いていたのは二人の若いいわゆる日本のピースコー(平和部隊)に属する化学技師 岡田正人 渡部昭夫の両氏であった。仕事の手をしばらく休めていただいて伺った所は 次のようである。

岡田氏は新居浜工業高校の工業化学科を卒業のあと 栗本鉄工につとめ 化学分析室に約6年間勤務の後1967年4月ここにみえ 渡部氏は茨城大学工学部(在日立)を卒業後 1965年4月から1967年5月まで関西ペイントにつとめ おもに鉛の分析に従事 1967年9月ここにこられる前しばらく ラオス中部にある錫鉱山で仕事をしていたが この鉱山はフランス人の経営で秘密主義をと



ラオス鉱山局の入口
左から Viravong Souvannavong 局長
Dr. C. Y. Li 筆者 Van Daalhoff 氏
Phanom Phouthakeo 部長
T. V. Lakshmanan(インド)顧問



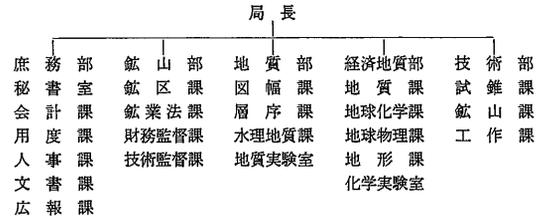
ラオス 鉱山局の化学分析室
左から 日本平和部隊の岡田正人氏
中央 筆者
右はし 渡部昭夫氏

ることもあってここへ移られたらしい。契約は2人も2年間 従って69年4月と9月頃それぞれ帰国予定とのことであった。渡部氏がみえた頃は部屋はゴミで一杯であったそうだが 今は窓はガラスの錠戸で 整理もよくゆきとどき ござっぱりしている。実験室の大きさは5m×10mほど 建物はラオス政府のたてたもの 設備はアメリカ合衆国 消耗品は1962年にイギリスがコロポブランで贈ったもので 数年間使われずにあつたものという。化学薬品の大部分と純水製造用のイオン交換樹脂は日本政府が寄贈 紙などはラオスの鉱山局が買ってくれる由。しかし器材がなくなるとピエンチャンでは揃わないため バンコクまで買いにいかねばならない。現在やっている仕事は国連の鉱産調査関係のもので 若干の器材 たとえば白金ルツボなどはこちらから入ってくる。化学実験室が動きだしたのは1967年9月頃で 現在数人の現地人実験助手と化学分析手が1人いる(この人は同時に野外地質助手としても有能とはW博士の話)。換気があまりよくないので お二人はじめ室員の健康がきづかわれ かつわらの局長に換気扇をつけてはというと 金がないとのこと。日本大使館に話してみても余計な口をだす。

鉱山局にはこの他に10年間の教育をうけてはいるが 大学に入る資格はない技術者として8人野外地質助手がいて(内1人は前述の化学分析手) これらの人は 物理探査 地化学探査などの機器を取り扱うことができる。他に9人の試錐手と試錐手補 機械工2人 自動車運転員数名 その他事務職員というのが現在のラオス鉱山局の職員である。国連によって職員の外国派遣費が与えられる時には 二つの場合が考えられ 一つは下級職員の訓練 他は上級職員に他国の状況を視察させることである。外国の大学に職員を勉学のため送るにあたって

は (1)現在いる職員を再教育しておくか (2)資格のある新しい職員をとるかの二法が考えられる。

1969年から1974年にわたるラオス政府の5ヵ年計画では (1)鉱山局の拡充 (2)錫採掘業の拡大 (3)鉱兆地の調査および (4)地質図幅調査がかかげられ 同局の計画しているラオス鉱産資源局の将来の構成は次の如くである。

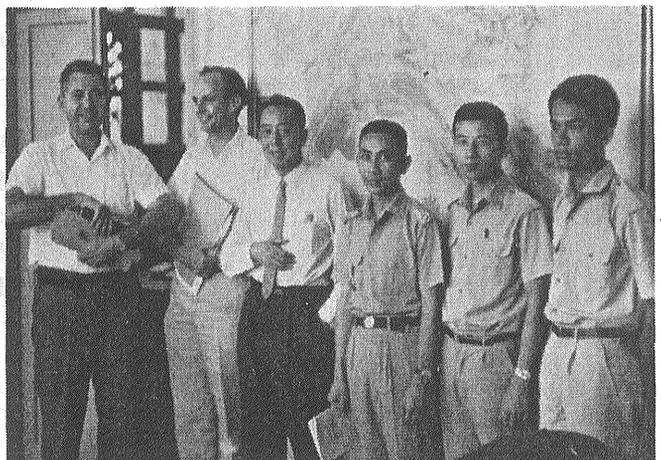


前回1965年2月私がここを訪れた時は 実際的には鉱山局は存在せず 今の局長は企画省の業務に従っており 鉱山局と称する部屋はがらんとし わずかばかりの書類本などがちりをかぶっているだけであった。それに比べると今度はたいへんな発展で 若い3人の幹部を中心として 局員全部がはりきって働いており この街にはちょっとふさわしくないとと思われる近代的な化学実験室には奉仕精神にもえる2人の若い日本人化学技術者がこれも若くてピチピチした現地人技術者と共に この国にとって歴史上はじめての科学的な面での国づくりの仕事をおしすすめている。わずか3年余りの間にこのように変わりうるものであるということは 私の今まで抱いていたいわゆるアジアの後進国の将来についての考えにかなりのショックを与えたことはまちがいない。

私ひとり化学実験室で岡田 渡部両氏と話しこんでいる内に 他の人々はホテルへ帰ってしまい 鉱山局長が自分の1956年のベンツで送ってくれる。ホテルへ帰っ



ラオス鉱山局化学分析室の棚の上の日本製化学薬品類



ラオス 鉱山局長室
右から 地質技師 Kampai 氏 探査部長 Phanom 氏 局長 Viravong 氏 Dr. C. Y. Li Dr. Workmann Mr. Van Daalhoff

たのは17時15分。バーをのぞくと先に帰った面々がのみのをとっている。いっしょになって30分程雑談。メコン下流域のカンボジア ラオス タイ 南ベトナムの4ヵ国の地質鉱産関係者が集まり 情報をもちより力を合わせ また資料 地質図などの編集を事務局がやりあまり今の所連絡のないカンボジアとも十分連絡をとることなど話題に上る。のみののはシトロン水 120キップとサービス料20キップ計140キップ 500キップが1米ドルだからこのホテルとしてはそう高くはない。これは日本の缶詰ジュースではなくて現地産の小さなレモンを水にしぼったものである。

18時50分約束にしたがい岡田 渡部両氏がホテルにみえ 色々話を伺う。あれからフランス語の授業をうけてここへこられた由 その意慾 努力 エネルギーには感心の他ない。

現在岡田 渡部両氏と同じ計画(いわゆる日本の平和部隊)でラオスにきている若い日本人は総計63人 ビエンチャン ルアンプラバンなど7ヵ所で働いている。首都ピエンチャンにいるのは 日本語教育の女性2人 生花教授女性1人 窯業1人 竹細工2人 体育関係ではバレーボール1人 柔道1人 体操1人が何れも学校の体育関係の先生方に教えている。畜産関係として養鶏1人 養豚1人 飼料作物1人 食肉検査3人 土木建築関係では都市計画2人 測量4人 建築4人 電気通信関係ではラジオ3人 テレタイプ1人 電話配線修理4人 水道3人 これは管理 配管 水質検査。この他に鉱山関係の2人が岡田 渡部両氏。王都ルアンプラバンには土木関係の2人と農業1人。中部ラオスのサバナケットには土木2人 飼料作物2人 農業1人 タケックには土木の2人。南部ラオスのバクセには土木2人 農業2人。またピエンチャンから約25kmの Tagon 農場に8人 サナカムから10km ほどの農場に稲作関係1人 農業2人。宿舎はいろいろで各関係筋がせわをしてくれる。岡田氏は月4,500キップの家で水道はなく井戸 渡辺氏は45米ドルの家を2人共同でかり これも井戸水だが電気冷蔵庫 扇風機がついている。前述のようにフランス語を勉強しておられる他 岡田氏は日本人から唐手を習っておられる由。ともかく規則的に毎日運動されることをすすめる。

19時ホテルをでてL博士が皆を夕食に招いて下さる。岡田 渡部両氏も。渡部氏らおすすめのシナメシやはエアコンのへやはすでにアメリカ人など白人の方々に一杯の由。蛙の足のゆでたの 牛肉のうまに いためそば とりの油煮 白菜のたの ビールとチップを入れて約7,000キップ。W博士夫人はいかにも英国人ら

しい若い婦人だが 蛙の足はきみがわるいらしい。どの皿もバンコクでたべるものと同じような味である。21時30分店をでて皆と分かれる。まだ華僑の店はあるにいて L博士ともども中国茶葉土産進出口公司天津土産分公司とあるほしなつめの箱をバンコクのおみやげにいくつか。タイは表向き中共産品は一切御法度。英文によると茶葉はお茶 土産は国産品となる。L博士は店のすみに青島産の黄色いりんごをみつけ二つ買って私に一つ。二つで400キップと大分高い品なので1人でたべるにはおしくバンコクへもってかえったが 水気が少なくあまりおいしいとはいえなかった。多分ハイフォンをへて入ってきたものではないかという。カートン入りである。渡部氏おすすめのコーヒー店はまた今度にしてホテルに帰ってねる。

17日 木曜日

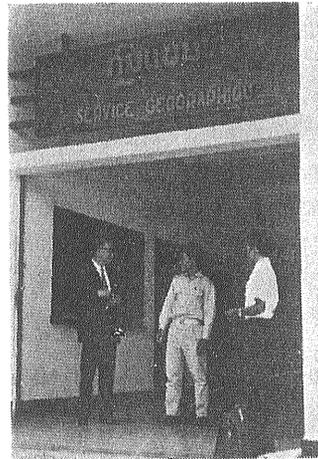
6時30分におきメコン河にそってしばらく歩く。土手が道から1mほどの高さにきづいてあるのは 先年の洪水の折作ったものときいた。お寺の前の土手にすわってスケッチを始める。時々金糸ですそをつづったスカートの娘さんたちが自転車やモーターバイクにのってくる。そんな時8mmをうごかす。本をもって登校するサフラン色の衣の若い僧たち。私のすわっているわきで店をはり始めるカップルー2mもあるサトウキビ大きなきりり ビニール袋に入った駄菓子。一方交通の大きな並木のかげの多い通りは自動車は左側 自転車バイク サムロー(足ぶみ三輪車)は右側。Diamondという看板の店一漢字によれば宝石屋らしい。メコン河にはもやっている屋形船 網か針をおろしている長柄エンジンつき小舟の老人 対岸のタイ側には高い水タンクらしいものと部落がみえ 人声さえ聞えてきそうである。青緑色の制服をきたラオス兵の運転するアメリカ製のトラック。いかにもひ弱そうな中老にもみえる兵士がとぼとぼと歩き ヤマハのオートバイにのってきた星二つのカーキ服の中尉? は青緑色の片つば帽をかぶり 名札やら飛行機型の記章やらを胸につけ 黒めがねをとると しかんだ顔が現われる。中尉殿といっしょの露店にすわり ケーキ二つとあげ肉まんじゅう二つ コーヒーにミルクを入れるかと女主人が手できき こちらに入れてくれと手で返事をする。しめて110キップ。店の隠居にみえる老人が中尉にこの方がうまいという風に丸いアゲパンを示すが中尉殿は別のをとる。黒いシナ服の女と若い半ズボンの男との話はシナ語である。DC3がメコン河の上を 東の方にとんでゆき 寺のやねの上には鳥の形のかざりが中央に坐っている。寺の芝生にはビニールの袋がたくさんちらばっていて ゆう

べすずにきた人々がコーヒーをのんですてたカスであ
ろうか。 アスファルトは道のはしまではおあっておら
ずトラックが黄色い河砂のほりをもうもうとあげて
いき ふっとアフガニスタンを思いださせる。

9時35分 L・W両博士とともにラオス王国地理局を
訪れる。 前回の訪問は1965年の2月だから あれから
もう3年余りの年月がたっている。 局長は相変わらず
びきびして精力にみちあふれた姿をわれわれの前に現わ
す。 部屋にはエアコンが入ってますます心地よいへや
になっている。 前回訪問後の同局の発展についてきく。
現在局員数約70名。 1968年5月写真測量課の作業を開
始し ケルシュプロッター2基 マルティプレックスプ
ロッター1基を備え これらの機器は Aero Service 社
およびアメリカ合衆国陸軍地図局の寄贈による。 この
他イギリス 西ドイツ フランスなどから贈られた立体
鏡数台。 1968年6月以降ILOの派遣によるイタリア
人技師がいて 当課の仕事をすすめている他は外国人は
いない。 しかし測地調査 写真測量の作業が始まれば
作業主任その他として外国人が必要となろうとのこと
である。 空中写真地質その他の写真解析作業も計画中。

現在では現地人のみにより地図作製 印刷作業など
を行なうことができ 初級職員はフランスに2年5ヵ月留
学して技術の研修を行っており またフランスの測量
学校に2人学生がおり 中級職員として1969年12月ラ
オスに戻る予定という。 国防軍要員や農業関係者のため
測量術の講習を野外実習をもこめて 各人2年間づつ実
施してきたがこれは1968年終了した。

全国の空中写真は約4万分の1のものがプリント ネ
ガともえられ これは1959年民間会社の撮影にかかる。
また1965年頃米軍のとったものも利用可能である。 こ
れらについてはモザイク索引図と各写真の中心点を示す

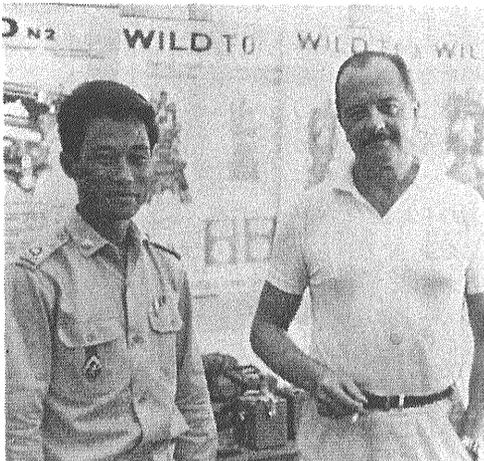


Dr. C. Y. Li
Chamsamone 局長
(ラオス地理局玄關にて)

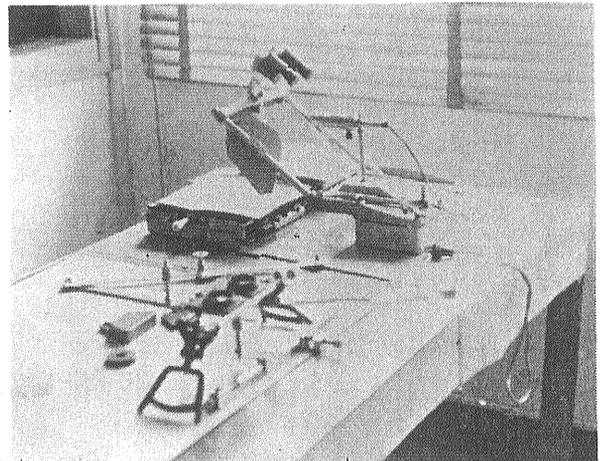
索引図とも利用できる。 空中写真からつくった縮尺5
万分の1の地形図は全国にわたり完成 公刊され その
内には野外でチェックしたものもある。 その購入につ
いてはその筋の許可を必要とする。

ラオスの主要都市の1万分の1の市街精図を次々にだ
しており 現在までにビエンチャン ルアンプラバン
パクセ サバナケット コーン コーン・スドンおよび
タケックのものがでている。 同局の建物は1957年約20
万米ドルの経費で作られ われわれがみた局長室 空中
写真室とも冷房つき。 敷地はだいたい8,000平方m。

同局長は現在ラオス政府の印刷局長をもかねているが
地理局自体どしどし多色刷の地図を印刷刊行している。
これらの地図は5万分の1の地図を除けば自由に誰でも
求めることができ たとえばラオス全図125万分の1が
300キップ インドシナ全図200万分の1同じく300キッ
プ ラオス分県図200万分の1 150キップ その他米軍
地図局の100万分の1 125万分の1などのラオスおよび
その周辺の地図を求めることもできる。



ラオス地理局空中写真室
左 Chamsamone Voravong 局長
右 ILO の空中写真専門家のイタリア人



ラオス地理局の空中写真室

この地理局の測量 製図 印刷の能力は今のラオスにとって貴重なものであり これから地質調査を実施しその成果を公表してゆくのに当たっても大いに活用すべきものであり 必ずその威力を発揮してくれるであろう。今のラオスのような環境の国にあって この地理局の仕事の様に地味なものを着実にしかも活発にすすめていくのは さぞ骨の折れることと思われ この青年局長の活力・能力と手腕とに感心するとともに ますます同局の仕事の発展することを祈ってやまないものがある。

10時50分同局を辞し ラオスのメコン国内委員会に同会議長を訪れる。同議長は以前ラオス企画省次官をかねていた人である。L博士から国連鉱産調査の現況将来の計画についての説明があり 議長の同意と協力の意志表示が与えられた。この建物には日本工営社のオフィスがいくつかあり 現在5人の日本人職員が働いておられる由であるが 時間がなくてお話を伺うことはできなかった。11時30分こんどは BRGM 班長の家を訪れる。うらの召使いの長屋が半分 事務所になっている。調査地との連絡用の無電機や図面その他がおいてある。経費や調査資料などについて話し合った後 12時10分辞してホテルに帰る。

12時30分ホテルに地理局長が迎えに来てL博士と2人 市中のシナメシヤで昼食をご馳走になる。鳩の油むしにわとりのみそに 白菜のにたの。キャベツのつけものがうまい。ところで同氏の夫人はフランス人の小児科医で一年に一回休暇で子供たちとフランスに帰ることができる由。こうしたケースはこの国では珍しいことではないらしく よそで聞いた話であるが ある省の次官などはフランスのパスポートをもち 年に1回フランスに帰国？ するという。日本の通産次官がアメリカの旅券をもって1年に1度アメリカに帰る？ といったもので 日本ではちょっと考えられそうもない。したがって国連の仕事でもフランスに下うけさせたいと指定してくるのは無理もないことで これではなぜ日本あたりに話がまわってこずにフランスだけに しかもあんなに高い請負費なのに仕事にいったのかわけがわかった。しかしこんなことは何もこの国だけのことではなく たとえば 先にのべた北東タイの鉱産地帯の国連の調査の際にもタイの政府が 下うけはアメリカ合衆国地質調査所と指定したのだそうである。

さて地理局長の話をつづけると 現在ビエンチャンには医学 教育 管理の3つのカレッジがあり 他に工科訓練学校があって 電気 機械その他の部門をもつ。フランス政府は医学 教育部門の援助をしており 同政

府経営の学校はビエンチャンに初級学校が一つ 地方に中級学校がいくつかある。初級 中級とも6年制。義務教育はない。フランスの援助団も大きいアメリカの USAID の方がさらに大きく こちらは教育 土木などの援助をしている。パテトラオ側でも地形測量などをしようとしていると思われるが まだ始めてはいないと考えられる……。15時から16時45分まで鉱山局を再訪し 話をまとめる。局長をはじめ皆まじめで熱心である。ホテルに戻り水をあびてベッドにしばらく休む。

18時30分L博士と買物・夕食に街にでかける。頼まれものの香水 オーデコロン 石鹸 おみやげの中共のほしなつめをさらに買いたす。かねて二人がめをつけていた SUKIYAKI の看板をかかげた店に入る。早速スキヤキを注文。ところがこれがとんだ羊頭狗肉でおせじにもうまいとはいえない代物。シナ料理 タイ料理は大概うまいのだが これは何とも味がなく いっしょにでた塩干のようなものをつけてむりに口におしこむ。これと同様なものはバンコクにもある由。さすがのL博士も口直しに何かおうという訳でキシメンとやさいの煮たものを1人前とって2人でたべる。先のスキヤキが2人前 キシメンとシンガポール産の缶入りビール1本とでしめて550キップ。ビエンチャン最後の晩飯はどうもお粗末でした。帰り昨夕渡部氏に教わったコーヒー店による。外のテラスでコーヒー。2人で160キップ。蚊やり線香をもってきてくれる。日本人の一群がどきどきやってきてその内の1人がコンパンワ。どうしてこっちが日本人とわかったのだろう。ビエンチャンのこんな所でコーヒーをのむのはコーヒーずきの日本人しかいないというわけか。20時45分ホテルへ歩いてもどる。

18日 金曜日

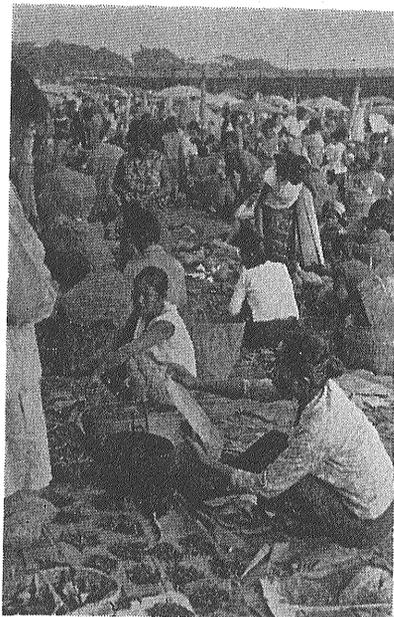
6時30分おきる。ホテルから15分ほど歩いた記念門の広場のまわりにある露天市に写真を撮りにゆく。大きな頭巾をかぶった山岳民族の女 ベトナム婦人 子どもの頃おはじきにつかったハトムギを買う制服の兵士 あれをどうしてたべるのだろう。魚はいろいろだ。ナマズ これにはビニール袋に水を入れてつめてある小さなものもある。メダカ 白魚 小さなエビ 大きな鯉にた魚 これはとても大きくて切ったものは牛肉のようにみえる。鯉そのもの。ヒキガエル これは生きて坐ってメダマをくりくりさせているものと干してクシにはさんだものとある。小さなカニ 生きていて二本のクシの間に一列にならべてはさんであり 足をもどもぞ動かしている。普通の大きさのコウモリ これは死んでいる。鳥はアヒル ニワトリ シャモ デンシ

ヨバト。豚は生きたのが丸い竹かごの中でぶうぶういっている。杉の皮のようなものをうっているが何にかうのか見当もつかない。野菜もいろいろだが白ナスハトムギ ニンニクの小さな束 ヒシの実のなま サトウキビ。バナナの花。青海苔のようなものをうっているが香りはない。蓮の葉に包んでくれるしろぶかしや緑色でややねばる米飯。ここはバンコクの日曜市をもっと田園的牧歌的野性的にしたものである。白いソーセージのようなものをうすく切ってはさんだフランスパン1こ30キップ ビニール袋入りのコーヒー10キップ 計40キップを買って市のわきの木の下で朝食とする。うしろは郵政省と郵便局で 黄色いヘルメットをかぶった日本人の若い男が手紙を投函していく。ISUZUの文字のある片つば帽のかいだしの中老男も日本人らしい。大きな米車をのろのろと動かしていく米婦人2人。この小さな町でそして市外に行く自動車道は何キロもないのになんでこんなパカでかい自動車を持ちこむのか。しかも買物の人でこみあう市の中に。市の一部には布セトモノ アルミ製品などをうるヤネのある常設の店も何軒もあり 男がたくさんいてミシンで何やらぬっている。ホンダ ヤマハのバイク。シトロエンのトタン自動車 大きなアメリカ製トラック。8時30分宿へ帰る くだびれた。ホテルのロビーではL博士が私のもってきた書類綴りを勉強中である。11時国連駐在員事務所へゆき これまでの経過の報告と最終的の話し合い。事務所次長ののみこみのいいのには再度感心した。11時45分さよならをいってホテルへ。

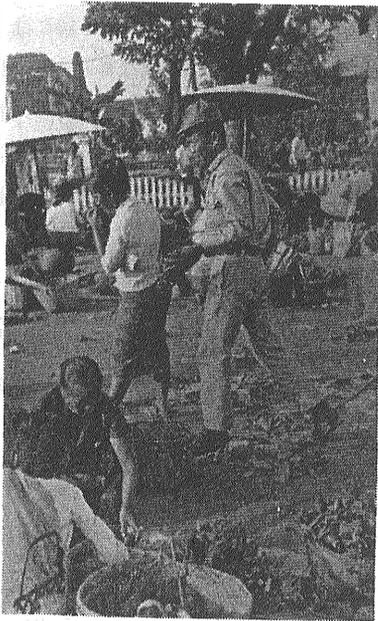
12時30分X夫妻が昼食に皆を招いてくれる。オニオンスープの他 ためしに鹿の肉のやいたのをとったが臭いがきつくてあまりうまくない。それに気がつかないで珍しかりと少しづつ皆にわけたが さすがにあまりたべる人がなくてまた皿に戻ってきた。オニオンスープが600キップ 鹿の肉が1,500キップ。バンコクの北東約150kmの所にも鹿の肉をくわせる所があり これは臭みもなくやわらかで とかく食物にはうるさい某ソ連人夫妻もお喜びであったので これと同じかと思って注文したのだが。この店は外人の経営らしくバンドとうたいがっている。いずれもラオス人。こうした店にもわれわれのホテルのバーにも制服のラオス軍人やら民間人がかなり入っているのはちょっと奇異に感ずる。一般のラオス人の生活はいたって素朴なのだから。14時30分昼食をおわり X夫妻に握手してわかる。

15時空港へ。空港税500キップ。タイのパーツで払ってもよくこの場合は25パーツとなる。普通の換算によれば20パーツである。バンコクからの飛行機がくるのは大分おくれ 16時10分ビエンチャン空港離陸。今度はタイ国内航空のバイカウント。普通のバイカウントは座席がゆったりしていて窓も大きく写真をとるにはとてもよいのだが われわれののったのは席が詰めてあってキックツな上 窓が席と席の間にあって写真もろくにとれないのはがっかり。バンコクのドンムアン空港上空はちょうどまっくらな雷雲が一杯で何回か旋回した後 やっと17時45分着陸 やれやれ。

(筆者は元所員 現バンコクエカフェ事務局)



ビエンチャンの朝市 手前にならべてあるのはとうがらし



買出しの兵士 (ビエンチャンの朝市)



山岳民族の女 (ビエンチャンの朝市)